William Faulkner の詩

Ⅰ. 『ヘレン・求愛』*Helen: A Courtship* 全訳
Ⅱ. 『ミシシッピー詩篇』*Mississippi Poems* 全訳
解　　説

森　田　　孟

Ⅰ. 『ヘレン・求愛』 *Helen: A Courtship*

泳ぐヘレンに

滑めらかな，番号で区別された幾夏にもわたる黄金を
彼女はすみやかな欲望のままに夏へと返し
彼女のものであるきらめく音楽の　音を消した
泡立つ火へとふらふら向かう水の手を借りて。

切り倒されて変貌してゆく緩やかに散開する狭間胸壁を
風化で谷と化した静穏ならざる処から風が刻んでいる所で
銀色の水の手は不承不承　手放す
彼女の少年っぽい胸と少年の持つような平らな脇腹を。

なおも切り開かれて波立つこの都市からずっと
一様で間断なき海の回廊に至るまで
水の手は青臭く未練気に音を消す
彼女の膝のとび色で単調な音楽の音を。

I

ビ　ル

大地の息子だったのだ　彼は。そして最初にして最後の

彼の心のたけを籠めた夢だったのだ　彼の夢は。もし彼が賢明だったら
眼でそれを育む空間と光を有しただろうが
言葉の天与の才に彼は崇られたのだ。

やがて彼は星々から星の光を奪い取っていたので
風を木々から失敬し，愛と死とを
不毛な合言葉にして誇らし気だった，
遂に耳聾いとなって　彼は沈黙とは何かを忘れてしまった。

それから彼には分かったのだ　沈黙には或る〈名前〉があったことに，
星の光は彼に見えるようにと或る顔を保持し
風を再び草や葉の中に見いだしてくれていたのだということに，それで〈彼女〉は
音楽よりも荘重で調子よく呼吸して動く
休むことなき銀の翼，もしくは星の光の
炎のようなものとなり，それで彼は落ち着くのだ，彼女と一緒にいると。

II

林檎の木の下には　イヴの悶える姿が
蛇の姿に絡まってきらめき，彼女の苛まれている胸は
彼のとぐろを傾斜させ太陽の逃亡を抑えて
東から西に至るまで彼女の罪の不吉な前兆となる。

冬の夜　人は暖くしていられるかも知れない
自分の犯した昔の罪を贖いながら。
うっとりするまでに血の付いた鞭を異常崇拝物にして
呼吸しはじめた時から　自分がそれを受け継いだことは忘れて。

しかし新しい神々は離れ去る：ところが太古のあの〈蛇〉は
それどころか王位に収まり王冠を戴き　寵臣には
あの黄金の林檎を侍らせるが　それは決して渇を癒しはしない

それでも食料となり人間の火屑は扇ぐ，その時チドリや
ツバメやかん高く鳴きながら北へ向かう小鳥たちは鞭を振っているのだ
ナザレ人に古代ローマ人にヴァージニア州人に。

III

三月がぐずついているうちに，足踏み鳴らして歩くたびに
木々の葉を鞭打ってがたがた鳴らし波立てるフアウヌスが：空しく
五月を追い求めながら，ドリュアスに先立った　彼女は無言のまま
だが　湿った脇腹の子宮に春を孕んではいなかった。

彼の緑の弱々しい葉の板ばさみのうちに
彼の焦がれ当惑した心臓はぎゆっとねじられて意識が遠のく——
歌っている風の回廊と競うには
欠けた月を　彼が思い遣って心痛している五月へと戻すがよい

あるいは，葉を熱烈にびっしり出して，留まって
彼の苦い母指を味わうにはそうするがよい
野生の蔓がほどけていって再び裸かにされた五月が
彼女の胸で音楽を奏でている葉を剝ぎ落すよう唆かすまで，
そして口唇を触れられていず夢みられていず見当もつかないコップから
芳しい太陽に醸された葡萄酒を啜るがよい：神の歓喜だ。

IV

彼女の未だ実らぬ浅い胸が　酔った林檎の木々の
風に揉まれる花盛りの中で青々としていると
七人のフアウヌスたちが　蜜蜂のようにしつこく言い寄って
彼女の舌の水っぽい若い蜜を啜ろうとする。

サテュロスは　葉をまとって身を隠し，彼女の接吻を夢見る

己が鬚の中に，己が口は見せたまま；
彼女の肉体が月の照る夜，絡みながら身震いしながら
自分の中に入り込んでくるのを夢みる；

それから気付く，フアウヌスが一人　他のよりも大胆に
己が手を彼女の胸に突然滑らせるのを
それで感ずるのだ　自分の中の生命が冷たくなって立ち去ってゆき
遂に彼らの接吻で生じた火が
小さくなり次第に消えてゆくのを：もう夜だ，それで彼は
笑いながら　苦くはびこった草を絞るのだ。

V

結婚の申し込み

ええっと，言うことにしよう：スカートの二つの束の間の
風船の間に　私は見たのだ　膝の荘重な杯状花が
鼻につく晴れやらぬ不機嫌な蜜蜂の方へと上昇開花してゆくのを，
彼らは小さな月のような彼女のこってり蜜づいた腰を巣箱としている。

これら細っそりした二つの月が離れずに合わさっている処へ　私は割って入りたい；
大層そっと私が　あのひっそり眠っている純潔を押し
開けるので　彼女は自分の狭い家で
私がまどろんでいるのを見い出すことだろう　眼覚めた時に。

いいえ：奥さん，私はあなたのお嬢さんを愛しています，と私は言おう。
（欲望のばらばらめくられる何かの板狭みから
風は　まだ半ば衣服を脱いだまま欠伸をしている春を強く引っ張り
彼女の胸を一度は溜め息へと短く削った手が
彼女の白い臀部をぴしゃりと打って薔薇色の火と燃やす）

……お若い方，あなたの健康，あなたの資産：それらはどうなのでしょう？

VI

私の健康？　私の健康は熱のある大声で苦しむ悲痛です
奥さん，私は――あなたの膝はこれまで歌ったことがあったでしょうか
彼女の膝のように，通りすぎる際にあれ程まろやかな愛情を示し
離れてゆく時にあれ程甘やかにしぶしぶとくっついていたでしょうか。

それはそうだったに相違ない：そうでない彼女など見られまい
（想像するだけでも　さぞかし甘美だったことでしょう！）
さあ見て下さい　あの小さな衣装の下の彼女の腿の
夢にもめったに見られない曲線を：何たる荘重，何たる本物！

そして乳房。乳房がそもそもこの一対の
臆病な兎のうるさくない穏やかな休息ほど小さくなり得ようか？
ハープで奏でられ和音をつけられた霊妙さと言えど
この半分ほども荘重で真性であり得ようか
彼には分るのだ　昔の魔術の物語は誰が見たか
出かける時彼女が　覆いに用いる音楽を誰が聞いたかを。

VII

ケンタウロスは太陽に　その七弦竪琴（リラ）を艫櫂でこがせるが
その琴は　かき鳴らして雷のようにとどろく手の下で
海と陸との中性の曲線を支え，
彼の肋骨をうつろな火で養う。

ケンタウロスは暴れ回る，昼間のあらゆる激しい不協和音の
粒子で膨らんだ黄金を身に帯びながら，

用心深い飛行を甘やかな未婚者らしく
玩ぶ夜の雌馬は　再び捕えられてしまう。

ようこそ，おお　美よ！　とヘレンは叫ぶ，そして　彼女は
ケンタウロスの突進を支えたものだった，ひよっとして
彼の一薙の下に　ぽつんと休息しながら
不動の本物の美人が一人現われるかも知れないと思って，だが彼女は忘れてしまうのだ
一たび手を触れられた夢は消えてゆかねばならず，後悔しても
確かなものは一つしか買えないのだということを，疑う余地のない眠りしか。

VIII

純　潔

あんなに若いのに扱い難い木に似て
といっても樹液は　緑の春の困ったうわさにすぎないが，
また　暖い闇の中で　処女の眠りを奪われることなく
それでいて情熱をこめて縋りついている木の葉に似て；

あるいは雨へと急ぎ形作られながら
それを銀色の熱い絶望のうちに見棄てる雲に似て
飛翔を夢みながら敢えてそうしない小鳥のように
種子撒く人は種子撒きを嫌い　全く穀物を刈り取らない。

美あるいは黄金あるいは緋色，それから長い眠り：
これらは全て　華麗な輝かしい呼吸の通行を買いとるので
陰欝な寝取られ者にされても〈時〉は〈死〉によって角をはやされ
それから今度は〈死〉が寝取られ者となる，目覚めぬままに；
しかし冷たい年月を振り撒かれながら　あなたは刈り取るのだ，あの，
楽園の蛇以来誰からも姉妹扱いされなかったあらゆるイヴたちによって盗まれ

たパンを。

IX

さようなら，おやすみ：おやすみはまずまず以上だった
私はたまたま一つを失って二つを見つけたのだから，
横柄な飢えた空気は増しながらだが
一人では薄すぎるので　姉妹二人に私は求婚しなくてはならぬ。

ああ　私の片意地な人よ，一対になりたがっているが
それなのに　進んでそうなると，何とあなたはどちらか一方でいる時より劣ることだろう！
何だって？　私が妻にしている彼女がいてまたあなたの夫になるって？
何と甘美な罪であることか，そんなに両方共であるように見えるのにどちらでもないなんて。

おお　寡婦となって不安な花嫁よ！　角など彼は感じ取るまい
柔らかく十分な枕で休んだのだから。それなのにああ私は，
もしあなたの眠りが質素なものなら　半分しか私自身のは
焼きなまされなかったのだ……私はあなたと眠りを共にしたりはしないわ，と彼女は言う
でも　明日来てね，あなたに死を与えましょう　と。
すると私を三度も寝取られ男にするわけか，おやすみ，さようなら。

X

ああ嫌だ，ああ嫌だ：私の眠りは私のもの，私自身のものだ
だから分け持ちたくない：私はそれを対のものにするつもりはない；
この，あなたが死の原因だと思っていることも　まもなく飛び去ってしまった：
そっとしておこう，あなたは再び完全にはなれないのだから。

こう彼女は私に語った，このように私のいい子は話した
彼女の春の葉のない脆さの中から，
彼女の乳房はまだ急かされておらず，憐れみに踏まれておらず
彼女のよく歌う単純な歌を歌いながらうっとりしたまま。

しかしどうだ　白い春が日がな一日ずっと
黄金の一対となり自分で自分の妹になって歌っている有様は，そして遂には
太陽に面をそむけさせられて彼女には分るのだ，誰に対してその歌が歌われたのかが。
そして　黄昏と露との間に婚姻がなされたのだ。
だからあなたは処女ではない，私の愛しい不身持さん:
全くのところ　私は夜な夜なあなたと共にいて孤独なことだった。

XI

その眠りは終らせないでおこう，私を目覚めさせておいてくれるのだから
私の白くさらされた枕の子宮は一対にならないままに，もはや
この無数の夜が　この静かな顔を私に相応しいようにするのは見ないですむ
夜がむなしく緩んでゆくのは　夜そのものが嫌うのだから。

歌い溜め息をつく口を　それぞれの眠っている姿で
思い出しながら　死を知らぬ黄金のヘレンたちは
それぞれの髪をくどくどと言いたてているものの　それぞれの淋しい天国で
私はどうすればよいのか，そこには眠りはないのだから。

私をただ目覚めさせておいてくれ　長らく忘れていたのだから
世界の全ての美を担いながらも曲がったりしない
この薄い甘美な両肩を，美は溶解しながらゆっくりと
この髪のすっきりした薄明りによって和らげられているが　それは
現にある白いもの（混合されているのだが）の全てには必ずしも当てはまらぬものだが；
この威厳に充ちた小さな乳房は　檻から出された眠れる小鳥たちのようだ。

XII

別れは形作らせないでおこう　一日間は一つの
口であった二つの口の間には，
言葉は絆を断ち切れない　生命が青春の間は——
それが灰色になると　さようならをいってもいい時となる。

生命は骨ばった構造であり，呼吸は肉体だ，
愛は硬化してまた再新する火だ
別れは紙の剣であり　生命は網目にかかっているので
脳卒中も笑い飛ばしてしまう。そしてこれが真実なのだ:

燃料を与えられた火は　そのベッドで多産で
瞑想にふけり，けちけちと充ち足りて
養われている間は己れのくり抜かれた壁を揺ったりはしない；
だが一たび燃料を食い尽してしまうと　彼女は
真赤になって絶叫して消える。それで唯，別れに
何らかの価値が生じ得るのだ　あなたと私とが死んだ時に。

XIII

おお　私は聞いた　夕べがトランペットで告げられるのを
吹き払われて雲一つない空の下だった，鷹が孤高に飛翔した
処だった　それで遂に彼ら各々の独自のものが
密接に結びつけられてしまう　その沈黙に，そこからは消え失せていたのだ

彼の身に備った尊大は。おお　私は見たのだ
孤独で誇り高いあの無情の鷹を，
それは私の心だった，弧を描きながら湾曲し消えていった，

彼がそれまで存在した空を清浄にぬぐいながら。

二羽の鷹がそこにいた，が　誇り高く飛翔して素早かった
一羽は熱烈な誠実で空を空虚にし
彼は独りで，恍惚に襲われて
嘴と嘴を合わせて　己が影立つ鋭い悲痛に施錠する
死の激しい冷却弧を描きながら，そして彼は
死んだのだ，まだ夜は暗く悩み悶えているが。

XIV

どこかには春が来て　緑と純然たる黄金を帯び
残酷な四月が　腰となった谷間に産み出され
どこかでは　消え失せてゆく冷厳な月が蒼ざめてゆき
一日が丘から丘へと　冷く火と燃えて目覚める。

しかし地上では　風と太陽に急(せ)かされ満たされて
泉という泉が春の素振りを再び子宮に孕む，
そこに私は今　眠っているが，更に密かに隠れて横たわりしがみつく，
しかし大地は荒れ狂った　21歳の私は家に入れてくれたのに。

どこかでは　月が満ちてきて私の不在に気付き
それから欠けていった　青空の風なき庭々を，
どこかでは　緑の深傷が浪費され（しかしこの方がましだが
豊かな荒廃の中で長く忘れられているよりは）
どこかでは　青年が　接吻せんと甘美に厳粛な口を見せていて——
それなのに　愚かにもあなたは　じっとしている：それはあなたには相応わないのに。

XV

私は愛を一度でも知っただろうか，それは愛だったのか嘆きだったのか
私がじっと隠れてきたこの若い肉体は，
そして私の心，この一枚の頑強な木の葉は，
根や枝が惨殺されても枯れようとしないのだが。

おお　母なる〈眠り〉よ，このところ数年は一年一年
各々冷厳な調べの鐘を鳴らして　〈時〉のゆるやかな夕べへ
次第に消え失せてゆくというのに，長い間の悲しみが引いてしまって
悲嘆が灰色になる時の涙のように　熱情も失せて；

〈死〉の乳房の間の暗闇の中は暖いのに
あのもう一つの乳房は　私が横たわっているところを忘れてしまった
そして幹からは　息づいていた木々の葉が剝ぎ取られる，
それでも一枚の頑強な木の葉は枯れようともせずに
激しく冷厳な大地に不安気に落ちつかぬまま
曙と共に死を蒙り，黄昏と共に生を得る。

II．『ミシシッピー詩篇』 *Mississippi Poems*

I

私はこの木を思い出すだろうか，年老いた時に，
この丘を，あるいはこの谷が太陽で満ちていた有様を，
更に　緑の午後が朝の黄金のために買われ
一日の終りには睡眠のためにまた売られる有様を。

熱く十分に降り注いだ紫色の太陽を
どの葡萄が蒸溜したのか　葡萄酒に訊ねてみるのがやはりいいだろう。
あるいは私には訊ねるがよい　手が想起するものはどういう内容となって
精神が長らく忘れている時に心を煩わすのかを。

風の静まった翼は高処で羽をはやして
梢を成し，ぼんやりと捉え難く
私の心を丘と谷で永遠に揺さぶる
谷と丘そのものがもはや生きていない時に。

しかし私に　この銀で鋳造された月を取らせて
私に　ヘラスから旋回してきたケンタウロス族が美の真昼時に
粒状と化した風に馬勒をつけさせてくれ，
そしてこの世の冷たい古い悲しみを運ばせよう。

II

死の月，明るい絶望の月：
銀色の海深く地球は溺れる
そして　彼女の生気の失せた落ち着かぬ髪である木々は
騒然たる音のように地表を求め続ける。

何としばしば私は　この絶望を味わわねばならなかったことか
目醒めては私の内部に血を吹く傷を感じて
まるで〈時〉と私は入れ替ったみたいだった，キリストが
十字架に掛けられたあの彼自身の冷たい場所を得ようとして。

〈時〉はここに留まっているのだろうか，私が若くて
この身体が輝かしい心の恍惚のためには使われないでいる処に，
私が永遠の死を求めたこの腿の中で切望されているというのに。
〈時〉は　私の口が溶け合った口を　吸い尽すのだろうか。

全てを受け継ぐ〈時〉は　私をこのまま放置しておくのかも知れない
悲嘆はじきに忘れ去られるのだから：
おお　母なる大地よ，優しくあれ：我々に至福を与えてくれた人は
月も鳥もいない夜を与えることも出来るのだから。

III
小 春 日 和

その高級娼婦は死んだ，巧妙な生き方をしたのに，
彼女の束縛は解かれて砕けやすい苦々しい葉となり，
彼女が最後に長く後ろを見たのは　誰が心痛してくれるか知るためだった
その差し迫った夜彼女の後方へ向けられた凝視に。

別の一人がこの上なく勢いを振うことになろう，今や彼女が死んだのだから
そして冬の滋養の乏しい清らかな雨が　彼女の部屋を掃き清める，
男の歎喜と苦悶のために：古く新しい花で
彼の欲望に玉冠をかぶせ，彼の頭に花環をのせる。

それでまた，世界は，寒さと死へ向かい出す
ツバメが藍色のうとうとと眠い日々を空(から)にし
清らかな雨が〈夏〉の呼吸の亡霊を追い散らす時——
その高級娼婦　あれは死んだ，巧妙な生き方をしたのに——

春が来ようとしている！　喜べ！　だが　それでもなくなりはしないのだ
つんと鋭い古くからの悲しみは，空中に漂う森の煙のように。

IV
雁

世界の縁(ふち)の上を越えて　彼らの背後で渋々している
空漠たる十一月を引き寄せながら，冷たい月を引き寄せながら；
彼らの淋し気な声々は何を思い出させようとするのか
肉となる前のこの埃に。何たる落ち着きのない古くからの

夢が何千年も安穏と眠りながら
私の血を鋭い不安へと目醒めさせることだろうか，どういう警笛が
彼らに鳴らされるのか。私はかつて自由だったのだろうか，生まれる前に
彼らの激しい淋しい空をさあっと飛び回りながら。

私の身体を形作り，私に視力を与えてくれたこの手が
呼吸の代金として私を土の奴隷にした。
飛び続けよ，おお激しく孤独に！　私の身体は死の嘲笑，
汝のは死の壮麗と速度，清潔。

世界の縁の上を越えて，或る壮麗な真昼から
或る激しい欲望を求めながら　それでいて無駄には終らない！
彼らは　赤く次第に消えゆく月を満たし空にして
泣き叫びながら，再び世界の縁を横切る。

V

彼は褐色の土に畝をつくる，影を曳きながら
風の通う音の静まった大きな通路に
倍も優しく。彼の足下で
その畝は崩れ，その端までいって

彼は向き直る。頭の辺りは平穏なまま
彼は再び大地を横切る：彼自身の土地は
なおもパンを途方もなく約束し
その芳しい力を彼の身の回りに清潔に吹き出させて。

森のちかちか光る碧色から
ムクドリモドキが一羽囀っている，涼し気に芳醇に；
そしてここ，彼が己が肺を一杯にしようとして空間を
求めている処で　迸るような黄色い

ウサギが走り出る，そのかたかた鳴る黄金は
軟かい土を越えて強健にされて　流れる恐怖の
方向定まらぬ線になる。
彼は叫ぶ。暗く流麗な松の木々が

彼の下降してゆく声を反映する　丁度木の葉が
その落下してゆく自己を出迎えんとして　清潔な涼しい深みを持ち上げるように；
そしてそれから再び　ムクドリモドキが　つやつやしい金銭を
黙って盗む盗人が

その生命への答えをこう記す
空の白いページの上に:
通り過ぎる人が読むための
強烈な　争いの空虚　と。

彼は再び動く，緑の丘陵の上の
雲のようにゆるやかな羊の鈴に合わせて；
どこかでは呟くような水域が眠っている
かすかに葉をつけた柳の仕切りの向うに。

風と太陽と眠り：それで彼は　褐色の土に
畝を作れる，純真な心に
倍も優しく，というのもここでなら人は
己が手足で自分にパンを与えられるかも知れないから。

VI

詩人　盲目となる

君，夜になるとすぐに私の一日を
正午にならないうちに分割してしまいそうな人よ:
これは何の慰みなのか――眠れる者を目醒めさせて
求めてもいない一日へとつれ込み，それから彼の目醒めている

わずかの時間を取って太陽と月とを奪うとは？

二三が六十年と十年は学ぶには短かかった——
闇が永遠に私を急襲しないうちには——
これらの流れや丘陵よ，だから私に時間を与えてくれたまえ
過去を全て忘れてその夕べや夜明けに向かう変転を
私の心に燃やしてくれるための時間を，もし私が見なくてもすむものなら。

風は世界から吹いてくる，私の頬に，
眼に見えない丘陵を型に入れて作りながら，だから私は絶望する。
君は強い：君の力を用い費さねばならない憎悪と
恐怖がある！　おお私に　捜し求める眼を残してくれたまえ
私の心を羽搏かせて黄金の部屋の空気の中を翔ぶために。

君，葉に芽に木に，
私を塵と苦痛の紅いの根から育て上げた人よ，
私の眼は取り上げないでくれ！　取るなら手足にしてくれ；私を
舌無しにし，音に耳聾いにしてくれ：私から呼吸を奪ってくれ
さもなくば私の黄金の世界を再び返してくれ。

VII

ミシシッピー丘陵：吾が墓碑銘

私がこれまで楽しんできた遙かな青い丘陵，
花みずきに覆われて銀の徒歩で
ブルーバードの「恋人よ！」そっくりを歌いながら春があとから蹤いてくるところだった。
私が道路まで　眼に見える端を踏んで行った時に。

雨に相応しいようにされたこの柔らかい口を
悲嘆に免じて黄金の悲しみだけにしてくれ，
そしてこれら緑の森を　ここで夢みさせ続けてくれ

私がまた帰ってくる時　私の心の中で眼醒めているために。

私は戻ることにしよう！　死者はどこにいるのだろう
頭上高く如何にも眠そうなこれら青い丘陵に
私が一本の樹木のように根づいている時に。私は死んでいる筈なのだが
私をしっかり抱き締めるこの土は　私に呼吸を見つけ出してくれるだろう。

その傷ついた木は　若い緑が全くなくて泣くに泣けない
黄金の年月を過ごしては我々は後悔を買うのだが。
だからこれを私の宿命にさせよう，もし私が　私の眠りを
揺すって中断させる春がまだ存在することを忘れるなら。

十二月：エリーズへ

私たちが共に知っていた春は　どこへ飛び去ったのだろうか。
不毛なのだ　昨年の大枝は；
でも私は見てきた　君の手が冬の天候を捉え
そこから雨を滑めらかに除り去って晴天にしてくれるのを。

もしこれらの褐色の悲し気な葉が　眠りの木からならば
もし春が去ってゆく時は　哀惜のみが沈むのだとするならば
もはやどの一日も裸の厳しい一年間を
私の心の中に滴らせて悲しませるようなことはなくなるだろう。

私の心の冬にあって　君は樹木を芽吹かせていた，
だから春はそれ故一段と甘美に思えたのだ，遅れてはいても；
君　荒廃した庭の中に
春をつれてきてくれる風　よ。

君はすっかり春だった，そして五月と六月は
君の身体の中で更に一層明かるく緑色となったが，今は陰鬱で
雨の降る年だし，太陽と月とは姿を見せないし

世界はすっかり暗いままだ，おお素晴しい。

三　月

林檎の木の下には　イヴの悶える姿が
蛇の姿に絡まってきらめき，彼女の苛まれている胸は
彼のとぐろを傾斜させ太陽の逃亡を抑えて
東から西に至るまで彼女の罪の不吉な前兆となる。

冬の夜通し　人は自分の犯した昔の罪の
暖かな許しを求めてゆけるだろう，
うっとりするまでに血の付いた船を異常崇拝物にして，
生れた時から自分がそれを受け継いだことは忘れて。

しかし古い神々は離れ去る——太古のあの〈蛇〉が
その代りに王位に収まり王冠を戴き，寵臣には
あの黄金の林檎を侍らせるが，それは決して渇を癒しはしない
それでも食料となり人間の火屑は扇ぐ——その時チドリや
鷲やかん高く鳴きながら北へ向かう小鳥たちは鞭を振っているのだ
ナザレ人に古代ローマ人にヴァージニア州人に。

十一月十一日

灰色の一日であり，一年中寒く，
空っぽの土地を横切るツバメの叫びは
春が南へ飛び去った証拠だ：何も転がされるものはない
冬以外は　空には。

おお　悲しい大地よ，この荒涼たる厳しい眠りが
動き出して向きを変え，時がもう一度緑となると，
空っぽの小径や小路には草が這うことだろう，

誰もすっかりそれを踏んだりする人はいないままに。

四月，五月，六月と進んで　心はすっかり
欠乏状態となり　それを緑に染めたり傷つけて目醒めさせたりできず；
出芽も何になる，灰色の十一月の大地よ，
緑化のために汝の眠りをさます必要はない。

傷ついた木々に当る風の　声をひそめた悲嘆は
小径小路の草を震わせ
〈悲嘆〉と〈時〉とは潮汐のない黄金の海であり——
しっ，しっ！　彼は再び帰宅した。

極　悪　人

彼の母親は言った：私　この子を　かつて
なかったような若者にするわ
（そして懇ろに揺すった，彼の柔らかい
髪の金色のつやを撫でながら）
彼の輝かしい青春は　かつて
どの錬金術士も見たことのない金属になることだろう。

彼の母親は言った：私　この子に
輝く激しい欲望を与えるわ
生活の浮き滓が全部
この子の火の中できれいに燃えてしまうまでに。
彼は強く陽気になり
また　彼は高潔に勇敢になるだろう，
だから　世はあげて残念に思うことだろう
彼が墓場で闇となれば。

だが　闇の方が彼に親切に
してくれるだろう　どこの誰よりも
（不毛の風に彼を揺すらせ

——尤も今や　彼にはどうでもいいのだが——
そして音なき高慢な星の光に
彼の金髪を撫でさせるのだから）

懐　妊

古代の音楽の隠された終止法に合わせるみたいに
ちぢこまった闇の中の彼女の種子は　温かく湿っていた，
そして冷たい星が三箇　壁の中で裂かれた：
雨と火と死とが　彼女の扉の上に据えられていた。

彼女の諸手は　むやみにしなやかに燃える火の中の胸の上で呻き悲しんで，
彼女の洞窟内に光を作った：彼女は見たのだ　己れの悩み抜いた
身体がひねられて見慣れぬ悲痛な七弦竪琴にされているのを，
その音楽は　かつては密着されただけの純粋な弦だった。

一つが別のと眠たげにおずおずと
彼女の浅薄な幸せな悲しみは　かつて結びついていた，
するとどのような明日の弦が　償いになるべきだろうか
昨日うっとりさせられなかった単一の歌のための。

彼女が目醒める時には　彼女の心には星三箇
冬の眠りが雨の中で緑に変りながら破られる時のように，
そして洞窟にされた大地の中では　春の噂が震えるのだ
彼女の腰部で培われて甦った結晶のように。

解　説

William Faulkner が自らを「挫折詩人」(a failed poet) と規定してみせたことは余りにも有名であるが，彼自身の好んだ撞着語法 (oxymoron) 風に言えば，これは，彼の自嘲自讃であり卑下自慢であった。その特異な輝かしい小説世界は，彼の所謂「挫折詩人」によってしか成就達成不可能な業績だった

のである。彼は確かに詩人として出発した。

1924年12月15日に上梓された『大理石の牧神』*The Marble Faun* は，その5年前の1919年4月～5月に脱稿完成した旨の明記がある。この詩作品は，"Prologue" 38行と，"Epilogue" 32行，及びそれらに挟まれた17の部分から成る本文736行との，計806行の長篇詩である。

1933年4月20日に出版された『緑の大枝』*A Green Bough* は，44部から成る総計944行の詩作品で，これも遙か以前に制作のものである。

1924年に Faulkner は，「韻文，旧作にして初期の」"Verse, Old and Nascent" と題するタイプ原稿の小論と共に，「ミシシッピー詩篇」 *Mississippi Poems* と題するタイプで打った12篇の詩作品から成る詩稿の束を，長年の友人で以前の級友だった Martle Ramey に与えた。

1925年に Faulkner は，ニュー・オルリンズで最初の長篇小説を書いていたが，そこで Helen Baird という美しい少女と恋愛し，手書き自装の美麗な本を二冊贈って求婚した。結婚は結局成らなかったが，Helen への彼の愛は，彼の初期の作品四冊に霊感を吹き込み，彼の芸術上の成熟を示す野心的な力作『野生の棕櫚』*The Wild Palms* (1939) の中核となった。Faulkner が Helen に贈ったのは，小篇の散文『五月祭』*Mayday* と『ヘレン・求愛』*Helen: A Courtship* と題する一連の14行詩篇であった。この二冊も今日では公刊されており，Faulkner の詩作品は四冊が，普く我々の共有財産となっている。

詩人として出発した Faulkner は，1920年代の半ばに，詩人から小説家へと転向することになるが，詩作に捧げた数年の精進は，その後の彼の小説に甚大な影響を及ぼした。Faulkner 自身，後年ヴァージニア大学で「どの作家も，自らを詩人と看做せば一層安楽だと私は思う」などと述べている。

本稿は，Carvel Collins と Joseph Blotner の詳細な序論付きで公刊されたテクスト Helen: A Courtship *and* Mississippi Poems *by* William Faulkner (Tulane University and Yoknapatawpha Press, 1981) に基づいて，この二作品の全訳を試みたものである。

『ヘレン・求愛』は，上記の序論で Collins が述べているように，「詩人の愛の様々な段階を16篇の詩を論理的に一連りに配列して報告」(前掲書 p. 35) したもので，序詩ともいうべき "To Helen, Swimming" は一連4行ずつ3連から成る12行の詩。各連とも奇数行同士，偶数行同士が押韻する（第二連だけが奇数行は unrepose—lose と押韻せず，変則)。あとは15篇ともソネットで，押韻構成は変化に富んでいる。前半の8行の押韻形式は，(1) abab, cdcd

の型が，II, VI, IX, X, XI, XII, XV の 7 篇，(2) abba, cddc の型が，他の 8 篇で，後半の 6 行は 3 箇の韻 e, f, g の様々な組み合せとなっている。結局，全く同じ型の押韻構成をもつのは，III, IV, VII で，前半の (2) 型と後半の eefggf の組み合わせとなっており，それと，I と VIII が (2) 型と effgeg の組み合わせで同型，もう一組 II と IX が類似の型の押韻構成（(1) 型と efeggf の変種）である。各篇 105～122 語で，一篇の平均語数は 112 語である。

頭韻が煩わしい程使用されていること——例えば，feeds and fans … fire (II), ring and ripple／panting puzzled (III), shortening and shuddering (IV), brief balloons／cloying cloudy／hive her honeyed hips (V), such sweet／Twin timorous (VI), sun to skull／gold with grain (VII), buys brave bright … breath (VIII), high and hungry／sweet a sin (IX), dusk and dew／lain lonely／single song (X), harp their hair／sings and sights (XI), break no bonds／fueled fire (XII), Somewhere is spring with green and simple gold (XIV), Bell their bitter note／grief in gray (XV)——。

Faulkner の小説でも顕著な否定語，特に un- を接頭語とするものの多用——例えば，unwombed, unlipped, undreamt, unguessed (III), unripe (IV), unsunder, undressed (V), unmarried, undoubtful (VII), unreft, unawake, unsistered (VIII), unleafed, unquicked, untrod, unfaced, unchaste (X), untwined, unbent, uncaged (XI), ——。

あるいは，sweet reluctance (VI), firely-cold (XIV) などの "oxymoron", あるいは Slide his hand upon her sudden breast (IV) などの "transfered epithet" の技巧，等，酷く凝った作風で，全体としては，T. S. Eliot の *The Waste Land* (1922) が出る modernism の時期らしく，内容・形式共々に大変〈古風な現代性〉とでも言える詩風であるが，どこか無器用に潮流に乗ってぎこちない〈前衛性〉を示しているところが，奇妙に新鮮でもあって，如何にも Faulkner の面目躍如たる感がある。

この一連中，I, VII, VIII, IX, XII, XIII, XIV 以外には，単数形や複数形で，breast, breasts が「序詩」も含めていずれにも一，二度は現れる重要語であるが，求愛の詩ならそれも宜なるかな，であろうか。それにしても凝りに凝った，いずれもそれぞれに難解な詩ではあり，贈られた Helen は余り感激しなかったようであるが，それも無理はなかったであろう。各篇の解題，Faulkner

の小説作品への影響や関連等々については，入念・燃犀な Collins の論考（前掲書 pp. 35–105）にゆずって，ここでは形体上の若干に触れるにとどめた。

上に述べたことは，『ミシシッピー詩篇』にも殆どそのまま当て嵌ることで——頭韻，否定語，oxymoron（例えば bright despair [II], happy sorrows [pregnancy] など）の愛用など——この作品群についても Blotner の "Introduction"（前掲書 pp. 131–47）に詳細を今はゆずるが，「三月」と題する一篇は，『ヘレン・求愛』の II と殆ど同一の作品であることにだけ一言しておこう。

第2連の最初の2行が，『ヘレン・求愛』の II では，In winter's night man may keep him warm／Expiating olden sins he did commit；であるが，「三月」では，Through winter's night man can take for warm／Forgiveness of old sins he did commit，となっている他，the wip of blood → the ship of blood／with breath → with birth／new gods → old gods／swallow → eagle と語句に変化があり，句読点 " , " が " —— " に二箇処変更されている。それらの意味についてなどの考察は，稿を改める。

*

「文藝言語研究　文藝篇 12」(1987) への修正補注

○ p. 20.　クラテール → クラーテール／ピロクテーテス → ピロクテーテース

○ VIII.　サニオン → スニオン

ピロクテーテースへの言及：トロイア戦争に赴く際に寄港したレームノス島で，彼が毒蛇に咬まれ，傷が膿んでそこに置き去りにされたことを指す。

（以上　柳沼重剛本学教授の御教示による。）

○ IV.　この中に出てくる27歳の男はヴェトナム戦争での捕虜であろう。捕虜虐待のさまが訴えられているものと思われる。（内田道子津田塾大学教授の御示唆による。）